

踊り通じ、仲間と一つに



習々よさこい踊りを披露した鈴木佑一さん。12年後、神戸市中央区

「よさこい」で生きがい実感

神戸・三宮周辺で二百に開かれた神戸まつりのパレードに、阪神・淡路大震災で母を亡くした大学生鈴木佑一さん(20)＝神戸市兵庫区＝の姿があった。震災後に入った児童養護施設でよさこい踊りと出会い、のめり込んだ。震災で家族はいなくなったが、踊りを通して仲間と一つになれた。「よさこいを踊っていると、生きていてよかった」と感じる。笑顔で汗をぬぐった。(上田勇紀)

震災に遭ったのは六歳のとき。母と二人で住んでいた同区の母子寮は一瞬がつぶれ、隣で寝ていた母はがれきの下敷きにならなくなってしまった。鈴木さんは近所の人に救出された。「奇跡的に助かった命」と思う。

直後に同区の神戸実業学院に入り、寮生活が始まった。一九

震災遺児の生 神戸まつりで熱演

九八年夏、同学院の仲間たちと高知県安芸市を訪れ、現地のよさこいグループ「東陣」と一緒に夏祭りでもさこいを踊った。この祭りをきっかけに、毎年夏高知に足を運び、よさこいを学ぶようになった。

「一度はまったら、抜けられなくなった」と振り返る。放課後や週末に寮で友だちと練習し、よさこいの基本をたたき込んだ。神戸まつりには九九年から欠かさず参加し、二〇〇四年には高知県のよさこい祭りにも出場した。今年四月、甲子園大学に入学、公認会計士を目指している。

この日は東陣から譲り受けた黄色の法被を着て出場した。同学院の子どもたちと鳴子を打ち鳴らし、「ヨッサー」と威勢のいい掛け声を出して踊った。沿道から「上手やね」と声を掛けられた。「今日は最高のできごと。満足な鈴木さん。これから、仲間と一緒に踊り続けます」